
DESTINY ADVNTERE **運命の冒険**

Dream Neon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DESTINY ADVANTERE 運命の冒険

【Nコード】

N74730

【作者名】

Dream Neon

【あらすじ】

「助け出して…」そんな夢から始まる冒険ファンタジーの物語。主人公の悠は親友、日奈太と。そして仲間と共に異世界で、生命と呼ばれる城を闇から守るために、そして謎の伝説を解き明かすべく今、戦う…。

プロローグ〜ハジマリノ唄〜

早く 早く

目覚めて…

早く 助け出して…

だ…れ…？

君は、誰なの…？

この世界の成り立ちについて

誰もが忘れてはならない掟でもある。

この唄は心に刻みつける。

）

世界は”生命”によって保たれていました。

その生命は あるお城でした。

お城が壊されれば

生命が壊れたことと同じ。世界は崩れる。

そうなってしまったら 世界はどうなってしまふのでしょうか…

決して忘れるな。

この世界を守るために。
世界の平和を守るために。
今 僕たちが生きていることに感謝をして、
“生命”を守っていこう…

）

今、私に出来ることをしよう。
未来が輝きますように。
私の願いはそれだけなの。

光あれ

プロローグ〈ハジマリノ唄〉（後書き）

きつと、長い小説になると思いますが、
読んでいただけると、嬉しいです。

第一話 はじまり

彼はガバツと、ベッドから起きあがった。

周囲を見回して自分の部屋だと気づき安心した。

彼は……とその前に彼の自己紹介をしよう。

彼の名前は なるみや 成宮 悠 ゆう 歳は15 中学3年生

好きなことは、冒険すること！

とは言っても、悠は一度も冒険などはしたことがない。

あるとは言っても、防風林でカブト虫を捕まえたり、山を探検したり。

悠が望むのは剣を使って敵を倒したり、魔法を使うようなこと。

あえて言うならば夢？

でも、ファンタジーなんて存在しないこの世界。

中3にもなつてこんなこと夢見るなんて、ゲームのしすぎなのかもしれないけど。

5

話は戻って…

悠は最近おかしな夢を見る。女の子が、「早く 目覚めて」とか、「助け出して」と何度も行つて来る。姿、形は見えなくて、ただその子の声が聞こえる。なんだか良く分からないからあまり気にしないでいるのだが…。

悠は考え込んだ…。少し時間がたつてハツとした。何か分かったことがあるようだ。

「そうだ、そう言えば……今日学校じゃん!!」

やっべ ぼおーとしていた！遅刻する！遅刻する！

そう思いながら悠は支度をする。

2階から階段をドタドタと下りながら

「母さん！ メシある？」

悠は早口で言いながら扉を開けた。
が……リビングにはどこにもいない。

（おかしいなあ……誰もいないなんて……）

ダイニングテーブルには焼いてあったジャムパンと牛乳。それから封筒が置いてあった。

（何だコレ？）

悠は、封筒に入っている物を取り出した。入っていたのは一通の手紙。
紙。

手紙に書いてあったことを読んで、ガクツと頭を下げてため息をついた。

『大好きな 悠ちゃんへ

パパとママは、2人仲良く旅行に行つてきます！

一ヶ月ぐらいで戻る予定です。

楽しんできま〜す！（^ー^）vブイ

『パパとママより』

（あのお気楽夫婦め！ これから俺はどうやってメシ食っていけばいいんだよ……！）

悠はそう思いながらパンを口に運ぶ。

ふと、時計が目についた。

……やば。

遅刻する！！

パンを加えながら走って学校に行く悠の前に、歩いて登校している見慣れた男の子の姿があった。悠はその男の子の肩をトントンと叩き、

「よっ！日奈太。お前も俺みたいに遅刻するぜ！」

「悠……お前と一緒にするなって」

彼は悠を見て、クスツと笑う。

「いや…パン加えながら走ってるヤツって、マジで遅刻してるように見えるから」

「何だよそれ…！」

悠と話している彼は、かさま風間 ひなた日奈太

歳は悠と同じ15歳。同じ学校。小さい頃からの友達で小学校に入る前に彼は転校してしまった。

それから数年、悠のいる中学校に転校してきた。今は親友！

「……今日、なんかあったか？」

突然 日奈太が悠に聞いてきた。

「な、何だよ急に」

悠の言葉に日奈太は答える。

「お前、いつもと違って元気ないからさ今日なんかあったのかなあ
くって思っ…違つか？」

「…うん…ってか、いつもの俺っていうのもよく分かんねーけど」
悠は黙って考えた。

（あ、そうだ。もし、あのおかしな夢のことを言ったら、日奈太はどんな反応をするだろうか…？）

「あのさ日奈太…俺」

「ん、なんだ？ なんかあったのか？」

「あつ…やっぱなんでもない」

「ん？ ならいいけどさ」

悠はあの夢のことを言おうとしたが、やめた。

あんなの夢のことだし、別におかしくはないと思ったからだ。
ただ…何度も同じ夢を見るのが、引かかる。

「お、おい！ 急いで学校行かねえと、マジで遅刻だぞ！！あの教師のことだ。掃除の押しつけ食らわされるぞ！」

日奈太の言葉にハツとした悠と、日奈太は急いで学校に行った。

…その後、結局遅刻した二人は生活指導の先生に叱られた上に、担任の教師から遅刻の罰として放課後、教室掃除をやることになってしまった…。

生活指導の先生の愚痴を日奈太と言い合いながら、なんとか掃除が終わった頃の外はもう茜色に染まっていた。帰り…日奈太は、

「俺、ちょっと寄って行く所があるから」

と言って、家まであと200メートル一直線だというのに、どこかへ行ってしまった。

悠の家まではあと1キロはある…。

日奈太と別れてから半分ぐらいまで来たところだった。突然、猫が飛び出してきた。黒猫だった。野良猫だろうか？首輪は付いていなかった。すると猫は、悠がいることに気づき、近づいてきて足下の方まで来ると、にゃあ と鳴いた。子猫だ。悠は体勢を低くしてその猫の頭をなでた。

「ん？ 何だお前？」

猫は、悠の顔を見てまたにゃあ と鳴く。

「あれ？…なあ、お前どこかであったことある？」

？

第二話〜夢〜

何となく悠はそんな感じがした。

でも、この黒猫には、あつたことがないはず。
気のせいかな…

「あ！ お前の目え綺麗なブルーなんだな」

悠は微笑むと黒猫は、走り去っていった。

家に付いた頃にはもう辺りは暗かった。

「はあ… やつと帰ってこれた… ん？」

ダイニングテーブルを見ると、また、封筒が置いてあつた。

（あれ？ 封筒は朝、ゴミ箱に捨てたはず。 ん？ 新しい封筒か？ 母さんたち帰ってきたのか？ でも、一ヶ月ぐらいは当分帰ってこないはずだし… 靴はなかったし…。 一度帰ってきたとか？ それとも、空き巣に入られたとか？）

悠は、いろいろなことを考えながら、封筒から手紙を出して、内容を見た。

「な… 何だよ、これ…」

『 …… お願い助け出して…… 』

（あの夢と似ている。 それともたまたま…… なのか？ いや、あの夢

を見ているのは…偶然で、これは単なるイタズラなんじゃないか？
そつだ…絶対そつに決まってる…)

悠は変な気持ちになったが、“単なるイタズラ”と心の中で繰り返した。

それから悠は、帰りに寄った近所のコンビニで買ってきたおにぎりを食べて、ベッドへ一目散！

「フア〜ア…今日は疲れたあ…早く寝よお…」

あくびを一つして、目を閉じた。

そしてまた、あの夢を見たんだ……………

あの…………、

私の手紙…………

見てくれましたか…………？

(この声…そつだ。いつも夢に出てくるあの子の声だ！)

…………君が、あの手紙を書いたの？

良かった。
見てくれたんですね！

君は……誰なんだ？

私！？

あ、ごめんなさい。

まだ名前を言っていなかったですね。

私は ……

(声が聞こえづらくなって！)

まって！君は

(だめだ……意識が……！)

ッピピピピピピ

ビクッ！！

悠はバチツと目を開けて、目覚ましの音を消す。

「あ……れ……？ここは……」

周りを見回せば、そこは自分の部屋だった。少しホッとした気分だけど、なんだか良く分からない気持ちがかみ上げてくる。
不安？恐れ？

(もう少しあの夢を……見たかったな)

いつもと同じく姿は分からないけど、声だけは聞こえていたし、話し合っていた。

(そうだ……もう少しであの子の名前が聞けそうだったのに……)

今日は土曜日。

学校はある。といっても部活の人だけ。

しかし、バスケット部に入っていた悠だが、でも、もう部活に行くことはない。もうすぐ夏休み。試合に負けて引退した。どうせ休みだし、いいことに今は両親がいない。

もう一度寝ようかと考え、ベッドに入り目を閉じた。

もしかしたらまた、あの夢を見ることができるかもしれないと思ったからだ。

……んが、無理だった。

バッチリ目が覚めてしまったものだから、全っ然眠くない。

「ハア」……」

起きあがってため息をつき、悠はリビングへ向かった。部屋にいてもしょうがない。

リビングに着き、ダイニングテーブルの方を見た。

(そういえば、何で手紙が置いてあったんだろう……？あの子とは、夢の中でしか会えないはずなのに“私の”って言っていたし。だったらあの子はこの世に存在しているのか？そしたら、夢で会えるのは何でだろう?)

いろんな事を考えていたらグーとお腹がなった。

「腹減ったな……パンでもあんのかな？」

悠は、納戸へ行き、パンを探した。すぐにパンは見つかった、リビングのほうへ向かう。

すると、さっきまで無かったモノがテーブルに置いてあった。

それは……封筒だった。

「まさか……！」

第三話〜手紙〜

悠は素早く手紙を取って、読み始めた。
手紙には こう書かれていた。

『先ほどは きちんと言えなくて
ごめんなさい。』

私はミュール王国のユナ城の者で、
リン と申します。

実は あなたにお願いしたいことがあります。
それは

理解できなかったため悠は声に出して音読する。

「ミュール王国の、ユナ城の、お姫様が、リンって子で……… “先
ほどはきちんと言えなくてごめんなさい” …… って事は、夢のこと
か! ? …… そしたら、あの子はリンって子で …… ん? ん! ?」

悠はかなり驚いた。

現実。それは良く分かった。

夢で言っていたこと、この手紙に書いてあったことは、繋がっている。

全部、全部、現実。それでも、まだすべてを理解した訳じゃないけど。

それに …… お願いってなんだろうか …… ?

悠は、いろいろ考えるが、やっぱり良く分からない。

手紙は、 『それは

重要な部分が分からない。

分からなくて、悔しい …… 。

(そうだ！)

悠は、父親の部屋へ向かう。そこには、父親がよく使うパソコンがある。悠は、インターネットを開く。『検索』の覧に、悠はこう書いた。

『ミュール王国』

これを検索すれば何かが出てくるだろうか？あの子は、助けてっていつも言っている。

何か困ったことがあるのだろうか？

ピピッ

「あ、でてきた……えっ？」

パソコンに映っていたのは、

『検索できませんでした』

『そんな所はありません』

(じ、じゃあこれは…？)

『ミュール王国 ユナ城』

検索の所をクリックした。

ピピッ

出てきたのは……さっきと同じ。

「何だよ……これ……」

この地球にはそんな王国や城はナイって事なのか？

悠は、小さく呟いた。すると突然 めまいが起きた。

「くっ！」

悠は、座っていた椅子から落ちた。
意識が少しずつ無くなっていく。

(なんだ…？急に…)

悠は意識がなくなっていった。

あっ…またこの空間…。

あの子、リンって子が出てくる場所…。

すべてが白い空間…。

姿は分からないけど、声だけが聞こえる。

考えると、可愛い女の子の声。

でも今は、その声が 聞こえない。

姫ヲ……………

(深く低い声。 男の声だ。こんな声、一度も聞いたことがない。)

え？

救ワナ…………ケレバ…………

「え、え！？ちよつとまつ……ん？」

悠は、周りを見回した。父親の部屋だ。

「つてえ！！！」

頭がズキズキする。

（あつ！そう…か。さっきめまいがして俺、椅子から落ちて…それから？…そうだあの夢…！あれは夢というのか分かんねえけど。あの時の声…あの子の声じゃねえな。そう…男の声だ。『姫ヲ救ワナケレバ』ってどういうことだ？）

「ハア…！」

ため息を付きながら、父親のベッドに寝っころがった。

「わけわかんねー」

頭をクシャクシャさせる。するとお腹が、グーと鳴った。手紙に氣付いて、すぐパソコンに向かっていた。朝ご飯はまだ、食べていない。

「腹減った…！」

ベッド起きあがり、リビングへ向かう。さっきの食パンはダイニングテーブルの上に置いてあったはず…。悠は、リビングに繋がるドアの前に立ち止まって考えた。また、あの手紙が置いてあったら…と。

（な、なに考えてるんだ。 あつたらあつたでいいじゃねえかよ！）
自分にそついい聞かせるが、心臓がドクドク、バクバクしていい聞かせている自分の声が聞こえない。

深呼吸をして、心を落ち着かせた。そして リビングに入った。
いつもと変わりのない風景が広がっていた。

「あつ！」

ダイニングテーブルの上に食パンがあつた。 周りには手紙が……っ
！？
ない。 どこを探してもない。

ホッとして悠は、椅子に座りパンを口にする。

（何で俺は、手紙なんかに恐れてるんだ？手紙があつたって怖がる
事なんて無いのに…）

ピーン ポーン

（なんだ？人が食事しているときに…）

悠は、立ち上がりガチャツと玄関のドアを開ける。

第四話　もう一人

「よっ！」

「日奈太!？」

玄関に立っていたのは悠の親友、日奈太だった。

「どうしたんだ急に？」

悠は、問いかける。

日奈太が家に来るのは珍しい。

「ちよつと、相談に乗ってほしくてさ……」

「相談に?……いいけど。とりあえず、中　入れよ」

「おう、んじゃ、おじゃまします」

日奈太が家にかかる。

すぐく久しぶり。本当に小さい頃はよく、遊びに来ていたっけ？
なんだか曖昧で良く覚えていない。

「あれ、悠のお母さんたちは？」

「あれ?言ってなかつたっけ。今母さんたちは旅行に言ってるんだ」

「へえ、旅行か。急な話だな」

「まったく……。息子一人家に置いて、心配とかねーのかって話した
よ」

「ふう〜ん……。つてか、お前、朝メシ中だったんだな。わりい」

「いいんだよ。それより相談って?」

「ああ。そのことなんだけど、ちよつとこれ、見てほしいんだ」

日奈太は、ポケットを探った。
取り出したのは……一通の……手紙。

「……読んで……いいのか？」

日奈太に聞く。

「ああ」

悠は手紙を開き、読み始めた。
書いてあったこと……それは…

『先ほどはきちんと見えなくて

ごめんなさい。

私はミュール王国のユナ城の者で

リンと申します。

実はあなたにお願いしたいことがあります。

それは

』

「こ、これ…は？」

悠はおそろおそろに問いかける。

「俺、最近変な夢を見るんだ」

（それっ………て！？）

「あと、もう一通来てるんだ」

「えっ！？ み、見せて！」

日奈太が、悠に手紙を渡す。
2枚目の手紙に書いてあったことは…

『それは

あなたと同じ夢を見て、

同じ夢を見ている人

その人に会ってほしいの。

きつと近くにいます。

会えば、いろんな事が分かるから……

それから 会いましょう。』

悠はこの手紙を見て、まさか…と思う。

「日奈太…お前、変な夢を見てるって言ったよな？」

「え？ ああ」

「どんな？」

「え？ えっと…白い空間にいて、女の子の声が聞こえて来るんだ」

「そして、『助けて』って？」

「そっだよ…え？」

日奈太は、悠の顔を見る。

「実は、俺も同じ夢を見てるんだ」

「じゃあ、もしかして…悠が、もう一人ってこと！？」

「驚いたよ。 同じ夢を見て、手紙をもらっているヤツが俺以外にもいたなんて…。 しかもそれが日奈太だったんだから…！」

二人は顔を見合わせ、クスツと笑う。

「あ、さっき俺、めまいがしてその時…あの白い空間にいてさ、聞

こえたのがあの子じゃなくて…男の声だったよな。あれ、なんだろうな…」

悠がさっきあったことを話す。

「男の声？」

日奈太は、不思議そうに答える。

「え？日奈太にはめまいとか来てないのか？その男が『姫ヲ救ワナケレバ』って言ってきたんだよ」

「姫ヲ救ワナケレバ…か…」

どちらも腕を組んで考える。わかりそうで、わからない。

分かることは、ミュール王国に何かがあったということ。でも、そんな場所はインターネットで調べても、無かった。たまたまその場所は、インターネットで調べてない場所なのか…でも、『王国』っていうし、調べればたいていは出てくるはず。

俺らが見ているのは、幻覚なのか？

そうしたら、その王国が存在するのか、しないのか…わからない。それでも…俺は…

部屋は、シーンとしている。

「なあ………」

声を掛けてきたのは日奈太だ。

「何？」

「…これって、現実なのか？」

日奈太も同じ事を考えていたようだ。
日奈太の顔はとても深刻な顔をしていた。

「俺、何がなんだか分からないんだ。何が現実で何が幻なのか…。何を信じていいのかも分からない。夢のことも、手紙のことも」

シンとなった部屋の中で、悠が口を開く。

「日奈太…。俺は、信じるよ。全部。俺も、良く分からないけど感じるんだ。なんて言うか…運命？って言うか、使命って言うか…。それにさ、助けてって言うんだから困ってるんだよな？そしたらさ、助けてやらなきゃ
なっ？」

日奈太はアハツと笑う。

「悠…お人好しすぎだぜ。馬鹿」

「ばっ……か！ひっでえ〜！！俺真剣に答えたのに！」

日奈太はそれを聞いて腹を抱えて笑い出す。

「アハハ…ハ…ハ…ハ…でも、なんとなく分かった。運命…か。なるほどな。じゃ、俺も信じるよ。これが現実だって」

「日奈太…！サンキュー！」

そうだ。何があっても。

「信じなくちゃな！」

「ああ」

悠と日奈太は、顔を見合わせ、ニツと笑う。

たとえ幻を見ていたのだとしても、これは、俺達に与えられた運命
なのかもしれない。

悠はそう思った。

その時…

！！

部屋が、青白い光に包まれた。

（なんだ！？）

腕で目をふさぐ。

眩しい光。

第五話〜白い空間〜

少しすると、光は消えていった……。
悠は少しずつ目を開ける。

体が沈んだ感じがする。

あ……今、倒れている格好だからか……。

あれ……？ どうして……？

あ！ そうだ、光！

ガバツとそこから起きあがって、最初に見えたのが日奈太の姿。
日奈太も倒れていた。
まだ、目覚めていない。

「おい！ 日奈太。 日奈太！」

体を揺するがピクリともしない。
いったい何が起きてるんだ！？
悠は辺りを見回す。

そこは…あの…白い空間だった。

夢で見る、いや、夢を見ているときにいる場所。
白い空間。

夢の中？ 違う。

寝た訳じゃ無いと思うけど……。

部屋が部屋に包まれて、眩しくて、腕で目ふさいで、
目を開けたら此処にいた。
なんで？

「うん……」

いきなり声が聞こえて悠はビクツとした。

日奈太が起きあがった。

「びっくりしたあゝ……。急に起きあがるなよ！」

心臓が、バクバクする。

「ん？ どうした、悠。ちびったか？」

「ばっ……！！ ちびってなんかねーよっ……！！」

悠は、顔を赤らめ、日奈太は笑う。

「……ここは……」

日奈太は思う、だって、ここは

「あの、白い空間の場所だよな」

悠はそう答える。

「ああ」

悠と日奈太の顔が真剣になる。

「何でここに来たのかな？」

日奈太は疑問に思うことを言ったことに悠は考える。

「わかんねー」

「眠ったのか？ 俺達」

「いや、それは違うと思うな」

日奈太の言葉に悠は即答し、冷静に日奈太は問う。

「そう言いきれるのか？」

「まあ、勘……だな。勘」

悠は、上を見上げて答えた。

「勘かよ」

(そうさ……すべてが、今起きていることが、現実だと言いつれる訳じゃない)

悠は、そう思った。

「お、おい アレ見ろよ!」

日奈太の声にハツとする悠。

「なんだよ!」

「目の前……見ろよ」

日奈太の目線は、その『目の前』から、離れない。

「目の前？」

悠も、日奈太と同じ『目の前』を見た。

「なんだアレ!?!」

悠と日奈太が見たところには、かなり大きめの鏡が、宙に浮かんでいた。鏡には自分たちが映っている。

「んだよ、ただの鏡じゃねーか」

すると、鏡面が一瞬カツと光り出し、映っているモノが変わった。悠は鏡に近寄り、鏡面に映っているモノを見た。

「……城？」

悠はそう言っていると日奈太は疑問を持つ。

「悠……城、だって……？」

「あ？うん」

「見えないのか……？」

日奈太の視線はずっと鏡を見ている。

「日奈太？見えるって……何が？」

「ら……」

「え？」

「扉が……ひら……く……扉が…扉が…」

扉……？悠は、もう一度鏡を見る。

でも見えるのは城で、扉なんて無い。

日奈太は何かに操られるように何かをブツブツと言っ。どうしちゃったんだ！？

「おい！ 日奈太、しつかりしろ！！」

は声を上げた。

「あっ……」

日奈太はハツとして、我に返ったようだった。

「日奈太、大丈夫か？」

「あ、ああ……」

奈太は少し汗をかいていた。

日奈太には何が見えたんだ………？

そして、日奈太は鏡をもう一度見て、

城……？と言ってきた。

どうやらもう『扉』は見えていないらしい。

悠は言葉を出す。

「もしかして、この城がユナ城ってヤツなのかな？」

この流れで行くと、この城がそう言うことになる。

そう言った悠に日奈太は、たぶん……と答えた。

「だけど……」

日奈太はそう言葉を続ける。

「だけど、少し違う……」

と、日奈太は呟くようにいった。

映っている城の空は、今にも雷が鳴りそうな雷雲があった。
そしてこの城は、闇と同化したように、暗黒の色、一色で染められていた。

「日奈太、違うってなんだよ？」

「え、あ、いや。なんでもないんだ」

そう日奈太は言った。さつきから日奈太が変だ。

『扉』が見えるとか、『違う』とか。

ん？ もしかして日奈太はなんか知ってるのか…？

「日奈太…お前っ…」

第六話　未来の姿

っ
…

悠が話しかけようとした瞬間、
突然声が聞こえた。

「日奈太、今のっ…！」

「っシ！今は声に集中しろっ！」

急にどこからか声が聞こえた。知ってる声。そう。あの女の子の。
その女の子が言った言葉。

それ……は、この城……の……未来……の……すが……た

学校の体育館と同じくらいのホールに、男は椅子に腰をかけ足を机

に載せながら足を組み、ただ美しく光るペンダントを眺める。

「おい」

誰かが、男に話しかけた。

男は、足を下ろし、椅子と一緒に体を声の主に向けた。

「何だ ダークよ」

「ったく、『何だ』じゃねーよ。あんた、マジであの城を
？」

声の主は、ダークと呼ばれる青年で、あきれたように答えた。

「ああ。今の時期に動き出すと丁度良いらしいのだ」

「らしい？」

「誰かが、そんなことを言っていたよ」

「……………あいつか」

“誰か”がわかったダークは、ため息をつく。

「分かっただけなのか、俺達裏世界の者は、あの城に近づけないんだぞ

！あのシールドに触れれば、俺達は消えるんだぞ！」

「はいはい。分かっていますよ」

男は、ダークの言葉をまともに聞かず、背を向ける。ダークは話し
を続ける。

「今までも何人、何体があの場合に近づき城を乗っ取るうとしたも
の、帰ってきた人のデータはない」

「そんなことは、ダークより我われの方が知っているさ」

「じゃあ、あんたは実際に城に行ったことがあるのかよ？」
「……………」

ダークの言葉に男は黙る。

「俺は最近見てきたぞ。その城」

「また、勝手に動いたのだな」

「別に良いだろ。代わりに情報やるよ。俺、何体か連れて城に向かわせたんだ。だが、あの城に張られているシールドに触れるも何も近づこうとするだけで、光となって消えた。後も残らない。この俺が、ソレを近くで見えていたから、本当のことだ」

男はまた、ダークの話を聞かず、言い返す。

「ドワールは、非常に弱い生き物だ」

と、男は言った。

「確かにな。ドワール一体では弱いかもしれないが、たくさんいると強いのは知っているだろう？」

その言葉に、男は馬鹿にするように笑い、

「我らは『ジャージユ』という最強なチームだ。ドワールが何体いようと、我のあの剣を使えば、一振りで消え去るだろう。お前の武器だってそうだろうよ。」

「いや……………もしかしたらドワールの方がお前より強いかもな」

「フンツ。馬鹿にしゃがって！言われなくてもドワールなんかより俺の方が強いって！それはそうと、あんた、あの城を乗っ取るうとしてるんだらう？絶対に簡単には手に入らないぞ」

ダークの言葉に男はニヤリと笑う。

「ああ。そうだな」

「なんだ？その言い方。作戦でもあんのかよ」

「当たり前だ。聞きたいか？」

男は、ダークの方に体を向ける。

「教えてくれるもんなら知りたいさ」

「まあ良いだろう。教えてやる。だが、他の仲間にはまだ言つなよ。」

「分かってるさ、ボス…」

悠と日奈太は、部屋に戻っていた。

あのあと…

悠と日奈太はあの場所で声が聞こえた後、またも突然光が一面に広がり、2人は光に包まれ、目を伏せた。

そして…光が静まり返ったと思い、目を開けると、

そこは自分の部屋だった

悠は、改めて思う。

また、おかしい事が起こった……と。

そのことを思ったのは、日奈太も一緒だった。
日奈太は、ソファアに腰をかける。

「未来の姿……か」

日奈太は呟く。

「どつという意味だろう……?」

悠はうつむいてしまう。

また訳の分からないことばかり。

「…なあ、これからどつする?」

悠は、日奈太に問いかける。

「どつするって、家に帰るけど」

「いや、そうじゃなくてさ……その、助けに、行くか?」

「出来ると思うか?」

「分かんない。でも……」

悠は言葉を止める。

「『でも……?』」

「助けに行かなくちゃ、ダメなんだと思う」

悠は、目をキリッとさせ、はっきりと言った。

「その根拠は?」

日奈太の言葉に悠は考える。

出た答えは…

「勘！」

「プツ……さっきと同じじゃねーかよ！ ハハッ」

日奈太は大声で笑う。

「るせよー！」

悠の顔は赤くなる。

「行くか！」

日奈太は急に立ち上がり、悠は少しビクツとして、目を丸くした。

「へ？」

「助けに、だよ！」

その言葉を聞いて、悠は少し微笑んだ。

「んー！」

頷くと、日奈太は手を差し出した。

「へ？ 何？」

「だから……『よろしく』ってことだよ。一緒に助け出すんだろ？」

一緒に…そう、一緒に。

「ああ！ もちろん！」

そして二人は手を強く握りあった。
その瞬間。握りあった手と手の隙間から、青白い光が溢れた。

パアアアアア

「な、なんだっ!？」

第七話〜運命〜

二人は驚いてとっさに手を離す。
すると、光は一瞬にして消えた。

「な、なんだっ！？今の！」

手が…あつい。それに…

「力が漲ってきたような…」

そう言ったのは、少しうつむいた日奈太だった。

「日奈太…？」

「悠、早く向かわなきゃ」

「む、向かうって…どこにだよっ」

「分かんねえ…」

「なっ、分かんねーってなんだよっ！」

「だけどっ！！」

日奈太は大声を上げた。

そして少しためらって答えた。

その声は小さく。

「だけど、なんか分からねえけど…感じるんだ」

「日奈太…」

悠は思う。

分からないことが多すぎると。

日奈太が何を感じるのか、きっと俺の勘とは違っただろう。
こんなあり得ないことが起きているのに、どうすればいいのかなん
て、教えてくれる人はいない。

「俺、今日帰るわ」

「あ…ああ、そうか」

「じゃあな

…」

ボタン

戸は閉まり、また独りになった。

悠は一度リビングを見渡す。

ダイニングテーブルの上には、朝食べていた食パンの食べ残しがあ
る。

それを口にした。パンは少ししけっていた。

窓から空を見ると、不思議ともう夜だった。

今日あったことを思い出しても、日奈太が来て手紙を読んで、そし
たらあの夢で見る空間に行って…。 たったそれだけなのに、どうし
てもう夜なのか。

また、訳が分からなくなる。

悠は自分の部屋へ行き、ベッドへ倒れ込む。

（にしても…なんだかすげー一日だったような気がする…それに

「なんか疲れた…」

（…ってか俺、今日ほとんど何も食べていないと言ってもいいくらい
なのに、あんまり腹減ってねえ…変だ…）

悠は少しずつ瞼が重たくなり、いつの間にか眠りについていた。

そして夢を見た。

ここは晴れた空の下。そして、風が通る草原の上。
太陽が強く光放つ。眩しい。

悠は、そんな草原の上に立っていた。

ここはどこだ？

声を出すと、自分の頭の中に響く。

変な感じだ。

悠の前に、数人の子供が話し合っていた。

この場所からでは、ハッキリとした顔は見えないが、
その子供達が、辺りを見回していたことは分かった。

しかし、悠の方向に目線が行っても、気付いていないようだ。どう
やら見えていないらしい。

ある女の子が口を開いた。

コレって運命ってヤツかな？

少し離れた場所にいるのに、その女の子の声が鮮明に聞こえた。続
けて、会話が続いていく。

運命ねえ〜

くだらない…

なっ……くん、運命をバカにしないでよね！

これだからゲーマーは…

っあ！……までっ！

とにかくこの先に何があるか確かめるぞっ

子供達は歩き出して、道を進んでいく。

まっつっ…！

足を進めようとしたが、悠の足は、石像のように重たく、動かない。叫んだ声も、自分の頭に響いただけで、歩を進める子供達には気付いていないようだ。

まっつよ…

悠の意識が遠のいていく。
世界が反転。闇。

すると服の中で、もぞもぞと何かが動いているのが分かった。

「んなつっ!?!」

ポトツ

「イタツ!」

悠はベットの上で立ち上がってそれを落とした。

「なっ なっ なんだお前っ!?!りっり、り…!」

(り、リスウ!?!な、なんでリスが家にいるんだよっ!しかも喋ってるしっ、何なんだ!?!)

第八話〜メル〜

悠は驚きを隠せず、手を口に当てる。

「イテテ… って落とさなくてもいいじゃないデスかぁ！」

喋るリスはむくつと起きあがる。

「お…お前…何なんだっ!？」

「えっ? 分かんないですか? 私は… …っ あぁ！」

「な… …何だよ?」

「いえ、えーと、私はメルですっ!」

敬語で話すリス。

メルと名乗る全身真っ白な体に、背中に水色のよく分からないマークのような模様が付いている。明らかに普通のリスのしま模様ではない事はわかる。

「で、なんでリスが…ここに!？」

まだ驚いていて、冷静になれない。

「えーと…それは後できちんと説明しますから」

リスであるのに、ニコツと笑ったのが確認できた。

「あ、ああ。わかった」

悠は一度、深呼吸をする。

とりあえず、何でリスがいるのか。どうして喋るのか。というのは置いておくとするか。説明するって言っているし。

「それより、先に話さなければならぬことがあるのです……!」

その言葉を聞いて、胸騒ぎがした。

(何だ?この嫌な感じは…)

「話し?」

「はい。あの、私は」

「ゆううつうつ!!!いるかああああ!?!」

大きな声を出しながら、玄関の戸を開ける。

「なっ…何だ!?!」

悠は、玄関のほうへ飛び出していく。

そこにいたのは…

「え……、日奈…太…?」

ここまで走ってきたのだろうか?日奈太は息を切らしていた。

「じ、じ…これ…何だよ!?!」

そう言って、手を差し出した。

「く、くびいいいいじまるづづづづづづー！」
「うわっ」

それは、真っ黒いリスだ。

「し、しかも喋るんだっ！」

日奈太が手に持っているのは、いや、持っていると言っより摘んでいるのは、真っ黒いリスだ。

日奈太は、汗を流していた。

走ってきたせいかもしれないけど、日奈太昔から小動物が苦手なのだ。何故かは知らないけど…。

普段のクールで冷静なヤツには見えなくなる。

「どうしたんですか？」

真っ白いリスが玄関まで来ると、そう言った。

「その声はっ」

『シッ！メ・ル』

白いリスは口ぱくで黒いリスにそれを伝えた。

黒いリスは理解し、頷く。

その事を、悠と日奈太は見えていない。

というより、それどころではない。

「うわっ！悠の家にもおおおっ！」

「お、落ち着け日奈太！」

「あ……あの！」

白いリス　メルが口を出した。

「ん！？な、何っ？」

「お、落ち着いてください！」

「お、お、落ち着けるかってー!!」

「日奈太…一度深呼吸しろって」

「お、おう…」

深呼吸して、心を落ち着かせる日奈太を見て、悠はププツと笑う。

「おい悠…笑ってんじゃねえよ……」

「ハイハイ、スママセンね。…で何？えーと…メルさん」

「あの…話しが…」

「話し？」

日奈太が問う。

「あ、はい。先ほどの…」

「ああ！」

悠は、掌で、ポンと拳を叩く。

やっと『先ほど』の話に戻った……。

第九話　王国から来た者

「伝説の四天王……か」

男は水晶を見て呟く。

それはいつの事だったか。

もう随分と昔になるのだろう。

自分が生まれる前の物語。

聞かされていただけ。伝説の四天王という言葉もその物語も。

だがそれは今、噂に過ぎない。

いや、噂も無いのかもしれない。

だが、結局いつのことであれ過去の話。

俺のすること。これからのことに、全く関係ない。

コツコツと靴の音を鳴らしながら一人の男が近づいてきた。

「ダーク……か」

水晶を見つめている男は、振り返ることもなく声を放った。近づいてきた男はダークだ。

「お前が『まず』って言っていたヤツ、どうなったんだよ、エヴオ

ル」

「それなら順調だ。ほら、見るが良い」

水晶を見るように進める男

エヴォル。

「へえ。あんたのことだからさっさと行動するのと思ったが、意外と地味だな」

ダークは水晶を見て言う。

「フンツ。言っている。しかしこの世界で生きるもの達の不幸な姿を見るならとっておきの策ではないか」

「ま、別にいいけどな…時間はたっぷりあるし」

再びエヴォルは水晶を見つめる。

「おお！そう言えば…」

ダークは何か思いだしたようだ。

「どうした」

「城の力が少しずつ弱まってきたぞ」

「…そうか。なるほど…」

エヴォルはククつと不気味な笑みを見せる。

（しかし、何故城の力が弱まっているのだろうか…エヴォルは何か知っているのだろうか？調べてみるか……）

「何処へ行く…?」

「ちよつと気になったことがあってね」

ダークはその場から、闇の中へ姿を消した。

「私は、ミュール王国から来たものです」

日奈太が落ち着いたところで、メルは話し始める。

「えっ…!? ミュール王国って…」

悠と日奈太は、顔を合わせる。

「…昨日、鏡に映っている王国の姿を見たはずですよ」

「何で君が知っているの?」

悠は問う。

「私が…あなた達に未来の姿を見せました」
「メルの顔が、悲しそうだった。」

「じゃあ君がああ場所に連れていったのか…」

「はい」

「だったら今まで夢に出てきたのも君なのか？」

「…それは……」

日奈太の質問にメルは戸惑う。

二人の会話を聞いていた悠は疑問に思い声を出す。

「本当にそんなこと出来るのかよっ!？」

その言葉にメルはピクツと耳が反応した。

「も、もちろん出来ますよ!だって私は、魔法が仕えるんですから
っ!」

「ま、魔法おおおっ!？」

悠の顔は…驚きでMAXだ。

あり得ない。あり得ない。

何をバカなことを言い出すのかと思えば…

「魔法…ねえ……リスが……」

疑わしい顔をする日奈太。

「まあ、そのうち分か」

メルの言葉が止まった。

「お、おい!」

悠は人差し指で、トンと額を押した。
しかし、動く気配はない。

「め、メル!？」

黒いリスはメルの側に近寄る。

「っあ……!すみません」

「お、戻った」

意識が戻って、悠は安心する。

黒いリスは、メルの耳元で声をかける。

それは、悠と日奈太に聞こえない早口な声。

「メル、大丈夫か？」

「ええ。なんとか。ちよつと力を使いすぎたみたいですが」

メルも二人に聞こえない程度の声で言葉を返した。

「無理はするなよ」

「でも……」

「気持ちは分かるが、焦らない方がいい」

「はい……」

「大丈夫か？」

突然、日奈太の声が聞こえた。

「あ、はい。それより、一刻も早く王国を救わなければ!未来の城
があの鏡に映ったようにならないように……!」

メルは力強く言うが、話しが理解できない。
いや、言いたいことは分かっているんだけど…

「結局、俺らは何をすればいい訳？」

悠は、そう問うと、黒いリスが答えた。

「お前達には、あのような未来にしようとしている組織を倒しても
らう。それが目的だ」

「なんかすごい事になってきたな」

日奈太がフツと、笑う。

悠はその言葉を聞いて、急に気持ちが高まった。

「ウソだろ…？マジな話し？」

「悠？」

「やべえ、俺、なんか楽しくなってきた！」

「…お。悠の冒険魂に火がついた感じだな」

「ではさっそく今日の夜、出発します」

第十話くアル・ボーレく

メルという言葉に悠はハツとする。

「えっ、でも待てよ。明日だって俺たち、学校…」

「何言つてやがる」

「えっ？」

日奈太がため息をつきながら答える。

「今日から、夏休みだろうが」

「ん…え…！？夏休み…夏休み……ああああ！」

そう言えば、担任が塾に行けだとか講習会に出ろだとか言ってたっけ…。

「アハハッそうだったなあ」

「たく…忘れてんじゃねーよ」

「いやあ…なんかさ、いろんな事がありすぎて、学校のこと忘れてたよ…！」

「じゃあ、今日は月曜日なのにどうして学校に行かないんだよ…！」

日奈太はボソツと呟いた。

「それでは夜、出発しますね。さあ王国を救い出しましょう…！」

「…行くか」

日奈太の言葉に、

「ああ。王国を救い出そう！」

悠も決心した。

必ず王国を救い出す！

これは俺たちに与えられた運命だ。

冒険が始まる…

日奈太は一度家に戻った。

一応親に許可を得るためだ。

かといって冒険に行くからと伝えるのではなく、数日間友達とキャンプに行くと言うことにした。

言っただってきつと信じてくれないと思うしな。

ま、いずれにせよ俺は親がいないからな…。

まあお気楽夫婦なもんだから、俺がいなくなっただってそんなに心配はしないと思うけど。

「あつ、そう言えばお前、名前まだ聞いてないんだけど」

悠は、腰を下ろし黒リスに指を差して言った。

「人に指を差すな」

「人じゃなくてリスじゃん」

「あ、あの…」

悠と黒リスの間に白リス

メルが口を挟んだ。

「えっと……。私たち元々リスじゃなくて人なんです」

「……………そうなの!？」

「はい」

「え……え……じゃ、なんで今リスの姿になってんの!？」

「あ、それは……」

メルは少し戸惑って答えた。

「私たちの世界から、ここのような異世界に来るときは、人ではなくて別のモノに成り代わってしまうのです。この世界ではリスになる魔法がかけられているようですね」

「うーん。分かるようで分かんないなあ。魔法って良く分かんないし」

ゲームの世界なら良く分かるんだけど、と悠は付けたしてへッと笑った。

「あ、で。忘れてた。お前の名前」

悠は、黒リスに目を向ける。

「……………アル・ボーレだ。アルでいい」

ブルルルル……

言葉を言った瞬間、電話が鳴った。

「わりい。ちょっと待ってて……………もしもし。成宮ですけど……」

『あ、悠。俺だ。』

「日奈太！……どうだった？」

『ああ……それが』

第十一話 日奈太からの電話

日奈太は、親にキャンプへ行くと言えど、断れと言われたらしい。キャンプへ行くぐらいなら受験勉強しろ、だとさ。

「で、どうすんだよ。日奈太……」

『……………』

行くよ。

「何だって？」

そう言ったアルは悠に問う。

「うん。来るって。なんか親に反対されたいけど」

「まあ。良かったのでしょうか？」

「日奈太が決めたんだ。それに……」

「？」

言葉を止めた悠にメルは首を傾げたようだった。

日奈太の言葉が嬉しかった。

親の言葉より、俺と一緒に冒険することを選んでくれたこと。

「正直、日奈太がこつちを優先してくれるなんて思ってたよ」
「なぜだ？」
「ん？うーんと…日奈太の親このことがあって…ちよつとな」
「聴きたいです。それ、聴かせてください！」
「まあ、いいけど…」

昔、日奈太と遊ぼうと家まで遊びに行つたけど、日奈太の家の両親はそんなことよりも勉強しなさい。といって、遊ぶことを禁じていた。勉強と言つたつて、まだ小学生でもない。つまり、まだ幼稚園児だつてのに、遊ぶなとか、勉強しろだとか。幼い頃の俺にしては、日奈太が可哀想で、日奈太の親は鬼だと思つていた。

今もそう思っているけどな。

実際、今も日奈太は、誰かと遊ぶところを見たこともない。

昨日、日奈太が俺の家に一人で来た事なんて無かつたはずだ。

日奈太は親の言うことをいつも全部聞いていた。

そのせいか、頭は良いし。よほど勉強していたんだろうな。

それでだ。さっきの電話で、親に反対されたらしいけど。

日奈太は冒険することを選んでくれたんだ。

行くよ。

勉強なんかするより、悠と冒険する方が楽しそうだしな。

さっきの電話で、日奈太はそう言った。

「昼になったら来るってさ」

「そうか」

「良かったですね」

ぐうづい

お腹の虫が鳴り出す。

まだ朝ご飯を食べてない。

っていつかこのところ俺、メシちゃんと食べていない気が…

「まあいいか。なあお前ら朝飯って食った？」

悠はそう問いかけながらも、ご飯の準備を進める。

「いや、食べてはいないが…」

アルの言葉に悠は応える。

「んじゃ、ちょっと待ってるよつ。あ、もしかしてペシットフードとかほづが良いと…!?!?」

一応、リス。何を食べるのやらと考えていると、

「普通ので結構!」

と、アルが怒鳴った。

第十二話　悠の家族

それから10分後。

「よし、出来上がり！」

悠はダイニングテーブルの上に、朝ご飯を小さな皿に入れて置いた。

「なんだコレは……」

「えっ、な……知らないのか！？コレ」

「初めて見ました……」

「うそだろ……お茶漬けだぞ！」

悠が用意したのはお茶漬けだった。ちなみにシャケ。

「俺らの世界では、ご飯に水をかけるなどあり得ないが……」

「そうなのか！？」

「あ、でも私見たことありますよ。ちょっと違いますけど……」

「ま、まあ食べて見るよ。なっ！」

「……じゃあ、いただくとするか」

アルは、おそろおそろソレを口にし、のどに通して少し黙った。

「……」

「どうだ？」

「……うまい」

「だろっ！？」

悠は、やりい！と指をパチンと鳴らす。

「あ、じゃあ、私もいただきます…」

「おう！食べる食べる！！」

「……あ、おいしい…かも」

「だろだろ！！んじゃ、俺も食べよつと！」

悠は最近お茶漬けばかり食べている。

毎日、母さんがそれなりにおいしいメシを作っていたのに、

この所、忙しそうだった。

帰宅する時間が夜遅くまで続いていた。

おかげでこっちは毎晩お茶漬けだったり、時にはカップ麺とか。

けど、母さんの働いている仕事はいつも昼には終わって、夕方までには帰ってきていたのに、最近は真夜中まで帰ってこない。いや、日付が変わっても帰ってこない日もあるのかもしれない。寝ている悠には分からないことだ。

聞こうとしても、朝早くから仕事に行ってしまう。

父さんは今出張中…だった。

それでもって、仕事の息抜きなのか、母さんと（出張から帰ってきたと思われる）父さんは、旅行に行ってしまった。

疲れているから、旅行って言うのもいいかもしれないけどさ、最近、ずっと顔を見ていない。会っていない。

いや、忙しいのは分かるけどさ、

たまに話しをしたりしてえんだよな。

一応…家族…だし。

「ごちそうさまでしたあ」

メルの声に気付きハツとする。

「こんな食べ物でも、なかなか腹がふくれる物なんだな」

アルはちょっと感心して言った。

お茶漬けの入っていた小さい皿はご飯粒一つ付かないくらいに綺麗に食べられていた。

「アルったら、素直に美味しいって言うたらいいじゃないですか」

メルはふふつと笑う。

そんな会話を聴いていた悠は、少し微笑んだ。

「? どうしたんですか?」

「あ、いや、なんかこういう雰囲気って久々だなんて」

「そうなのか?」

「親が忙しくて一緒に食べる時間が最近なくてさ…」

「まあ、そうなのですか…」

悠は、席を立ち上がって、自分の食器と二匹の使った食器を持って台所に置く。

「なんか、朝メシが昼飯になっちまったな」

ハハツと悠は笑う。
でもその笑顔が無理しているようにメルは見えた。

ピンポーン

「あ、もしかしてもう来たのかな…はぁーい」

悠は、玄関へ向かいドアを開ける。

「よう。来てやったぜ」

「日奈太っ！」

「お、やっときたか」

「う…まだいやがるのか」

リビングの開いたドアの前にいたアルの言葉に日奈太は少し後ずさる。

「早くあがれ。向こうの世界に行く準備をすろぞ」

「早くあがれって、ここ俺の家なんすけど…」

第十三話　旅立ち

悠の声はアルには聞こえてないが、聞こえた日奈太は笑った。

「あいつ、絶対俺らより年上だと思っぜ」

日奈太はそう言って家上がった。

「もしかしてオッサンだったりするかもなあ」

悠は、へっと笑ってリビングに入る。

勿論それもアルには聞こえていない。

「あ、来ましたか」

メルはダイニングテーブルの上で声を出す。

「では、さっそく私たちの世界に行きたいと思います」

「どうやって行くんだよ？」

「それを今から説明するんだよ」

悠の言葉にアルは低い声で答える。

「向こうの世界に行く方法、それは…」

メルは息を吸い込み、ハッキリと言った。

「あなた達三人は今から眠ってもらいます!」

「は?」

「マジ?」

悠と日奈太は啞然とする。
悠は口を開け、聞き返す。

「え、あの、眠るって寝るって事…だよな?」

「そうです」

「な、なんで?」

「その方法で向こうの世界に行けるのか?」

悠と日奈太の言葉にメルは一呼吸置いて話し始めた。

「私自身、向こうの世界とこちらの世界を行き来することは簡単なのですが、私以外。つまりあなた達三人を私たちの世界に送るには、

とてつもない力を使うことになります。そこで、あなた達が眠りについたとき私が向こうの世界に送る、と言う作業になります。これは、起きているときより“大地のエネルギー”を使う量が減るためです。そうすれば、向こうの世界に確実に送れるはずなのです」

「……難しすぎて俺には良く分かんないんだけど。……大地のエネルギーって何？」

今の説明で頭がおかしくなりそうな悠だった。

「俺にも良く分からねえけど、とりあえず寝ればいいんだろ？」

「そういうことだ」

日奈太の言ったことにアルは答え、言葉を続ける。

「向こうの世界に着いたらいくらでも説明してやる。それより、昼食も取ったから寝ることが出来るだろ。さっさと寝るぞ」

そう言ってアルはソファアに向かう。

「ああ、それとお前ら靴は履いて置いた方がいいぞ。向こうに着くとき、何処に行き着くか分からないからな」

「何処に付くか分からないって……」

マジかよと、悠は思いながら外靴を取りに行く。

家の中で外靴を履くのはなんか悪い気が……。

あとで綺麗にしておかないとなあ。

「準備は出来たか？……じゃあメル。あとはよろしくな」

「はい」

アルは眠りに入る。

「うーん。良く分かんねえけど、俺も寝るよ！」

「そうだな。そうだ、もし、その移動に失敗したらどうなるんだ？」

「っ… それは…」

日奈太の言葉にメルは黙ってしまふ。

「日奈太、大丈夫だって！信じていれば必ず失敗なんてしないって！」

悠は日奈太の肩をポンツと叩き、ニツと笑う。

「…そうだな」

「ってことで、俺も寝よおっと！じゃ、なんかよく分かんないけど、よろしくな！」

「はい！」

悠はソファに腰を下ろし深呼吸する。

向かい側のソファには日奈太が座り眠りに入る。

「では…おやすみなさい」

悠は静かに目を瞑る。

第十四話 異世界到着！

俺は気付くと、白い空間の中にいた。

いつもの場所。

ここから始まった。

そしてどうやら

ここから始まるらしい。

冒険ってヤツが。

ふと、声が聞こえた。

ここに居る理由が大きな事に関係があるなら、私たちは…

潔く放つ言葉は優しくも聞こえる。

この声はいつもの女の子の声じゃ無かった。

一体誰なんだろう。

それに、

聞こえた一言がなんだか俺に言っているような気がした。

いや、俺たち。

かもしれない。

日奈太もこの言葉……聞いてるかな？
日奈太はこの言葉を聞いてどう思ってる？

俺は ……

「……さん！」

まだ、夢の続き？

「起きてください！」

起きる…？

「悠さん！」

「どわっ！…！」

女の子の音が耳元で響いて起きあがった。
心臓がバクバク。

「びつくりしたあゝ！…！ついたた！」

いつの間にか腰を打ったようだ。

痛みが走る。

なんで？いつ？

「だ、大丈夫ですか、悠さん！！」

「っ ……だ、大丈夫……っ、君、誰……？」

悠は声をかけてきた女の子を涙目で見上げる。
見たことのない女の子。

腰辺りまである金色の髪を風がなびかせる。

桃色の頬。透き通るような桃色の眼。

なんで俺のこと知っているんだ？

「…だ、誰って私です！メルです！」

「メ…ル？なっ！メルってあのリスのか！？」

「元は人間です！」

「…あー。なんか、そんなこと言ってたなあ……いッ！」

急に稲妻のように腰に痛みが来た。

だから何でなんだよ！

いつ俺、腰打ったんだよ！？

そう手で腰を抑えながら想う悠に、

胸の前で祈るように手を組んだメルが口を小さく開く。

「っ、ごめんなさい！！こっちの世界に来るとき、魔力が足りなくて落としちゃったんです……」

そう言えば、寝ている間に俺たちの世界から向こうの世界に行っ
…とかなんとかで、
無事こっちに着いたってわけか。

ん？

オトシタ…？

落とした。

落っことしたってええええ！？

無事に着いた訳じゃないのかよ！！

俺、信じてたのに！！

いや待て、俺。

冷静になれ。そして聞くんだ！

「えー…と具体的に…どこから…デスカイ？」

それを聞いたメルはオドオドと小さな声で言った。

「…らです」

「え？」

「空……からデス。私と悠さんの場合は…デス」

空。

そうか、そうか。

俺スカイダイビングしたのか…。
そりゃ腰もおかしくなるわな。

ハハッ…と乾いた笑いを悠は返す。

「あ、でも、空から落ちたと言っても、5メートルぐらいですけどね」

あー。だから俺生きているわけか。

短けえスカイダイビングだったんだな。

悠は問う。

「ちなみに、この着地の仕方って、失敗？成功？」

「成功…です」

「あ、そうなの？」

「私の恐れていた失敗は、“ファンタステイカーレ”と呼ばれる、悠さんが“白い空間”と言っていた場所から出られなくなることです。あと少し魔力が足りなかったならあの中に一生留まることになるでしょう…。ですのそれと比べると…」

それを聞いた悠はゴクツと喉を鳴らした後、
まだ（5メートルの）スカイダイビングで腰を打った方がマシか、
と思った。

結局、信じていたことは成功したんだ。

悠はやっと辺りを見回す。

ここは風通しの良い場所で、草の茂った野原のようだ。

今になって気付く。

「そう言えば…日奈太はどこだ…？それに、アルってヤツも…」

どうやらこの野原にいるのは悠達二人だけだ。

「それ、なんですけど、どこに落としたのが分からないんですう！」

「！」

「嘘だろお！！？」

「嘘だったら良いんですけど、嘘ではないので…。探しに行きましよう！」

「なんか助けに行くだけか、探しに行くだけか忙しいな！」

悠は息をゆっくり吸い込み、空に叫ぶ。

「これこそ冒険って感じでゾクゾクするぜ！」

へへッと笑う悠につられてメルも微笑む。

「で、どうやってアイツら探すの？」

第十四話 異世界到着！ (後書き)

ちり…ちり…まじゅうか… (*—*)

第十五話　導き

「えっと…そうですね。……そうだ！あれを使いましょう！」

メルは何かをひらめき、辺りを見回した。

「ん？何か探しているのか？」

悠はそう問うとメルは辺りを見回しながら、

「何か軽い物を…」

と答えた。良くは分からないが悠も“軽いもの”を探してみる。

「うーん…これはどう？」

悠は靴の側にあつた木の葉を拾い上げ、メルに見せた。

「あ！いいですね。それ、渡してもらっていいですか？」

「お、おう」

こんなんでいいのかよっ！

と、内心でツッコミ、悠は葉を渡す。

受け取ったメルは両手に葉を乗せ、腕を伸ばす。

「何すんだ？」

「魔法を使います」

出たっ！ファンタジーの世界じゃあり得そうなヤツ！

いや、すでにこっちの世界に来るって事自体スゲー事だったんだけどさっ。

「見ててください!」

メルはそう言つと目を閉じて、大きく息を吸い込んで発した。

「リーファエラートっ!!」

そう唱えると急にブワツと風が吹く。

「うわっ!」

メルの長い髪をなびかせながらその風は東のように一点へ集まり、メルの掌に乗っていた木の葉が空を舞う。

「風よ!我らの友をそなたで導き、共に木の葉で示せ!」

声を張ると風は少し止み木の葉だけが空間を舞う。

メルは悠に振り返り、フフツと微笑む。

「はは…は…スゲーな…」

魔法って…本当にすごい。こんな事もできんのかよ!

「道は木の葉が教えてくれますっ!行きましょう!」

悠は立ち上がり、大きく息を吸う。

「おっっ!行くっぜ!」

木の葉は風に揺られていく。

「……………おい！」

「…うう」

なんだ？

「おい！聞こえているなら返事をしろ！」

「き、聞こえてる……」

日奈太はそつと目を開けながら起きあがる。

外がざわざわと騒がしい。人々の声が聞こえる。

なんだ…？頭が痛い。

「ここは…？」

「フィガロ村だ」

そう言った男の声が頭に響いてまた頭がぐらつく。
なんなんだ…？

つていうかフィガロ…って聞き覚えのない村だ。

ん…？村？今時、村なんて古くないか？

ハツとして日奈太は今やつと顔を上げる。

違う。向こうの世界に来たって事だ。

見慣れない場所。

さっきまで部屋にいたはず。

つまりそう言うことだ。

俺の隣にいる若そうな男が口を開く。

「大丈夫か？屋根を突き破ってここに落ちてきたが、どっか打ったか？」

「お前は…誰だ？」

「ああ。そう言えばお前にはまだ名前を言っていないかったな。アル・ポーレだ。アルと呼んでくれ。あんときゃあ、リスだったかな。これが本来の姿だ」

アルと名乗る男は、どうやらあの黒いリスで、紺色の髪の毛に蒼い色の瞳め。それに日本じゃあり得ないような不思議な服を着ている。意外と若い。

「もつと老けてると思ったぜ」

「そうだな。これでも300年は生きてるぞ」

「なっ！マジで言ってるのか!？」

「お前達から見ると、俺は17ぐらいか？」

「……ああ」

本当にそれくらいの年齢。

背丈から見るとは高校生に見える…。

まさか、そこまで老けてるとは……。

「そりゃ光栄だな。だがこの世界はお前らと違って時間の流れが違う」

「時間の流れ？」

「そつだ。時に太陽の長い時間があり、月の時間も長い時もある。時に空が色を変えることもある。そして、場所によって時間の進みが違う現象もある」

「なんだか変な世界だな」

「こちらから見るとお前達の世界は規則的に時が流れている、それこそおかしいと思うがな。で、だ。俺が300年生きていようと成長の過程はお前らと同じだ。早く時間が流れようと、遅く流れようと、成長は時間と関係がない。」

要するに。時間の進みかたは違つても、成長は規則的。つまり俺たちの世界とそんなに変わらないってことだろう。

と、日奈太は簡単に要約してみた。

「ややこしい世界だな、まったく……」

日奈太は簡単に要約すると、ため息をついて少し笑う。

「まあ、そこまで時間や成長に気にすることはない」

アルはそう言つて立ち上がる。

今この場所はどうやら小屋の中のように、山になった藁の上だった。天井には壊れた穴があった。青空が見える。

「そう言えば、屋根を突き破つてつて、俺ら落ちてきたのか？」

「ああ。どうやらメル的空間移動の着地が失敗したようだ」

そうか、もしかしたらそれで頭を打ったのかもしれないな。

日奈太はハッと気付く。

「ってか悠とメルってヤツは!？」

「どうやら離されてしまったようだ。合流しなくては。そろそろ起きろ。行くぞ」

「あ、ああ」

日奈太は藁から下りて、小屋を出た。

アルが小屋のドアを開けた瞬間、入り込んだ風が日奈太の頬を撫でた。

第十六話 村長ボルド

一見ただ自由に空中を舞う木の葉。
見えない風に揺られて、俺たちの道を示す。

「あ、見えてきましたよ！」

メルが指さす場所を見る。

木の葉の先にあるのは一つの村。

どうやら俺たちは丘の上に落ちたらしい。

村はここから見下ろしても随分と大きな土地を持っていた。

突然、宙に浮いていた葉は地面に落ちてしまった。

「ど、どうしたんだ!？」

「す、すみません魔力切れです。私の魔力がまだ完全に戻ってない
せいで…」

向こうの世界からこっちに世界に送り込んだんだ。

考えただけで凄いことなんだ。

魔力とやらが無くては仕方ないか…。

「大丈夫だ。あの村を見つけたんだ。あそこに…アイツらがいるか
もしれない」

「はいっ」

「行こうぜっ！」

悠は一步を踏み出す。

「あつ！悠さ　　！」
「ふえ？」

声をかけられた時はもう遅かったっ！

グキツ！！！！

「ふおおおおお……おおつ……お……おおお！！！」
「つうわ！！！」

何かを踏んで、苦しまぎれに出された声に驚き足を大げさに上げる悠。

「な、なななんかふんだんだけどおおおおお！！！！？」
「なんかとはなんじゃー！！！」

その何かはガバツと起きあがり叫んだ。
またもその驚きに悠は尻餅までついてしまった。

「そして人を踏んでおいてまず謝らんかっ！！」
「あ、え。あ……ご、ごめん……さないっ」
「うむ。それでよいのじゃ……ん？………おおおおお！！！」

ハッキリ見ると若く長い白髪の男性。
また目元には化粧をしているのか紫のライン入り。
それに変わった服装をしている。
腕輪だったり大きなピアスだったり。
その男性は悠を見るなり声を上げた。

「お主……ユウというものか！？」

「なっ…んで!?!?」
「なんじゃったかなあ…おつ。そうだ。成宮悠じゃる」
「っ!?!?」

なななななで俺の名前知ってるんだー!!!
俺、この人知らねえぞっ!!

悠は唾然としていて、声にもならない。

「あ、あのお、あなたは?」

リンがおそろおそろ男性に話しかけた。

「お?お主は知らん顔じゃな。ふむ…」
「え?」

「…っそうか…。…おお。お主リンというのか。めんこいのお!」
「っ!?!?わ、私の名前っ」
「ほっほっほ。当たり前じゃな」

俺から見るに、リンもどうやらこの人に会うのは初めてみたいだけ
ど。

なんで名前がわかったんだっ!

「お、忘れておった。ワシの名前はボルドじゃ。ここから見える村
の村長をしてる」

「まあ…村長をお勤めに…」
「若そうなのに村長なんてやってんのか。すげーな」

「いや、これでも2000歳じゃぜ。嬉しいこと言ってくれてあり
がたいのお」
「はっ!?!?」

待て待て待て。嬉しいとかの前に！

2000つてなんだっ！普通の人間何回生まれ変わるっ！！？
ぐるぐると頭の中で混乱する。

すると、リンがそつと話しかけた。

「あの、悠さん。この世界で歳のこととか考えない方がいいですよ」

「えっ、えっ？」

「時間の流れと言うのがあるんですけど、この世界では時間の流れが不規則で

「ス、ストップ！わ、わかった。俺難しいの分かんないから考えないようにするっ」

考えるな俺っ！頭が破裂する！

悠は一呼吸置くと、ボルドに目を移す。

「一つ聞きたいんだけど。なんで俺らの名前分かったんだ？」

「私も知りたいです」

ふむ、と言うとあぐらで座っていたボルドは立ち上がった。

「その話はもつと良い場所で行おう。とりあえず村に戻ってゆっくり話しをしなければな。お主ら行くぞ」

振り返るなり村へとスタスタと歩き出す。

急な行動に悠とリンは少々戸惑ったが、足の速いボルドに二人は付いていった。

村に近づくと分かったが、村の領土はとても広い。

「だけど……ボロかった。
焼け跡のようなものや魔物に襲われたような爪痕があった。
今にも壊れそうで……」
ボルドに聞こうとしたが、彼は……いや、村長はもう遠くにいた。
急いで追いつくなり、ある家に入った。
ドアは布で出来ていた。見渡すと、中は案外広く綺麗だった。
適当に座れ、といったボルドは特等席なのか、
一番奥の中央に腰を下ろしていた。
とりあえず悠とリンは入り口近くに座った。
悠は、口を開いた。

「で、さっきの……」

「ちよつと待っておれ。もうすぐ来る」

「……………え？何が？」

「失礼。お伺いしたいことがある。よろしいか」

ふと、背中から声が聞こえた。

布の向こう。低い声の男。

「かまわん。入ってこい」

ボルドがそう言うと男は布をめくり上げる。

入ってきたのは低い声の男と、見覚えのある……………

「あ……………あああああああ……！！！」

悠の声は家を筒抜け、外にまで響いた。

第十七話 魔水壘

「日奈太あああ！生きてたかつ」

入ってきたのは、日奈太と見知らぬ紺色の髪の毛に蒼い色の瞳をした男だった。

「勝手に人を殺すな」

「アハハ！怪我はなさそうだな」

「運良くな。悠は？」

「俺、スカイダイビングしたんだぜっ！」

「パラシュート無しでか？」

「いや、地上まで5メートルの空の旅。おかげでケツ打った……」

「なるほど。だから頭はバカのままなのか」

「ヒツデエー！！」

悠と日奈太の再会の会話に、ボルドもメルも男は啞然としていた。村長ボルドは、おそろおそろ声をかけた。

「のお〜……。お二人さん……。そろそろ話しを……」

「あ、そうだった」

悠がハツと思い出した。二人は村長の周りに集まり座り込んだ。そう言えば、と思い出して、悠は日奈太にそつと耳打ちをした。

「なあ日奈太、お前と一緒に来たヤツ……誰？」

「ああ、アイツは」

「お主が、風間 日奈太。そして、お主はアル・ボーレじゃな」

「！！！？」「」

悠と日奈太は驚いた。

「なんで俺の名前っ！」

その口に出した日奈太。悠が驚いたのはそこではなく、

「お前、あの黒リスなのかああああっ!!!?!?」

悠は立ち上がって、指を差していた。

「そうだが……」

「オツさんかと思ってたあああ!!!」

「褒め言葉か、嫌味なのかわからんなお前の言い方」

アルはそう言って、ため息を付いた。

「お前さん、元気なのは良いことじゃが、とりあえず落ち着いてくれ」

「お、おう」

ボルドに言われ、呼吸を整えてまた座り込んだ。

「なあ、どうして俺たちの名前が分かったんだ？」

悠は、問いかけた。

「お前さん、魔法は信じるか？」

ボルドに問い返されて、悠は戸惑った。

「……うん……まあ。っていうか、さっきメルが魔法つての使ってたから信じるしかないよなあ。俺、自分の目で見たものは信じるし」

「……ほう。なら、魔法を見るまでは信じていたか？」

その問いかけに、今までの自分を思いだした。

魔法なんて、考えたことあったっけ？

いや、でも……

「魔法があればいい……。そう思ったことはあるな！」

そう元気強く言うと、ボルドが朗らかな笑みを浮かべながら言った。

「そうか、そうか……。変わらんのお……」

最後の語尾に違和感を感じた。

「え……？」

変わらない……？

すると、ボルドがハツとしたように焦りながら誤魔化した。

「ああ！いや……気にせんでええっ！それより……」

一呼吸置いてボルドは話し始めた。

「魔法というものは、不思議なものでな。信じなければそれは魔法として成り立たん。簡単に言えば、信じるとは祈るといふ事じゃ。

お前さんの言った、あればいい。と言うのも祈りであり、信じる心

なのだ。とまあ、魔法の説明は、このくらいじゃけんのお」

「ふーん……祈りかあ」

そうボソツと口にする悠。

ボルドは続けた。

「さて、ここからがお前さんらが知りたがっている事じゃ。わしは魔水晶を使う魔術師でな、簡単に言えば占い師みたいなもんじゃ」

「占い師？」

「そうじゃ。魔水晶を扱う者は魔法を信じる者でなければいかん。

また、多くの知識と力。しかしまあ、自分の目で見た方が早いじゃろっ」

言うなりボルドは左手の掌に上から右手を重ね合わせ、掌の間に息を吹きかけながらスローモーションのようにゆっくりと右手を持ち上げた。

左手の掌の上には、光を纏まとった透き通る透明の水晶があった。

水晶の大きさはバレーボールよりは少し小さいサイズだった。

ただ重ねてあっただけの左手に現れた水晶。

またも尚、目の前で“魔法”を目にした悠だった。

「す……げえ」

「今のが……魔法……」

悠も後に口にした日奈太も水晶に魅せられた。

しかしそれは、この二人も同じだった。

「素晴らしいです……。魔水晶とはなんて綺麗なのでしょうっか……」

「まさか……生きていて、魔水晶を目に見ることがあるとはな……
光栄だ」

メルとアルが口にした言葉に、そこまですごい物なのか？と悠は思う。

アルが続けて言葉を発した。

「魔水晶を扱える者など……いや、もう伝説の魔具だと思っていたが……」

魔具とは魔法道具のこと。

その言葉を聞き、ボルドはフェフェフェと笑って答えた。

「そうか……。もう、この魔具も伝説となる程古くなったのだのお。まあ今は既に魔水晶など選ばれたものしか使えんそうじゃからの。昔はもつと多くの者が使っておったが……」

ボルドは俯き、何かを思いだしたようで、深いため息をついた。

一呼吸おくと、ボルドは顔を上げ悠の前に左手を差しのべた。

急に目の前に差し出され悠は驚いた。

「っ！？」

「さて、お前さんにはこの水晶から何が見えるかのお？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7473o/>

DESTINY ADVNTERE 運命の冒険

2011年11月16日21時31分発行